中世ヒンドゥー教 一元論哲学における自然観

戸田裕久
(立正大学)

中世インドのシヴァ教諸派のうち、カシミール・シヴァ派の呼称で知られるトゥリカ派 (Kashmiri Trika)⁽¹⁾ によって、一切を主宰神たるシヴァに帰一する一元論的神学体系が確立された。シヴァ教の根本聖典群 (Śaiva-āgama) においてすでに一元論的言明が随所に見られ、それに依拠して一神教的神観を掲げた諸派は総じて‘一元論的シヴァ派’と称されうるのであるが、ただ、その神観を哲学的に深め体系化するのに中心的役割を果たしたのはトゥリカ派であった。この派の諸文献のうち、Pratyabhijñā (再認識) 系論書がよく整備された理論書として知られている。ウトパラデーヴァ (Utpaladeva, 900-950 CE) の著わした *Īśvarapratyabhijñānākārikā* (『主宰神再認識論頌』略号 *IPK*)、ならびに、アビナヴァグプタ (Abhinavagupta, 950-1020 CE) による註釈書 *Īśvarapratyabhijñānavimarsinī* (『主宰神再認識論省察』略号 *IPV*)⁽²⁾ 等がそれである。本稿は、主にそれらの記述に依拠している。

さて、本学会の本年度の共同研究テーマは「仏教と自然」であるが、筆者はこの課題に臨んで二つの難点に直面させられた。一つには、シヴァ教は所謂「外道」であり、しかも *IPK* および *IPV* は仏教、特にその無我説に対する批判の書であるという点。いま一つは、シヴァ派の諸論書に自然に関する具体的な記述を見た憶えがないという点であった。それは、そ

もそも一元論的シヴァ派には「しぜん」と「じねん」のいずれの意味においても「自然」という観念がないのではないか、との疑念すら懐かせ、研究の行方を危惧させた。⁽⁴⁾ともあれ、以下では *IPK* および *IPV* の記述に基づいて一元論的シヴァ派の中心的な教説を紹介した上で、その「自然」観（もしくはその有無）について検討してみることにする。

1. 一元論的シヴァ派の世界観

(1) 神我一元論

Pratyabhijñā 系論書に見られる一元論哲学、特にその世界観について以下に概観する。まず、*pratyabhijñā* という概念を明らかにしておく必要があるだろう。*pratyabhijñā* という語は、字義的には「再認識」を意味するのであるが、一元論的シヴァ派においては特殊な意味を付与された術語として用いられている。*IPK* の冒頭頌中⁽⁵⁾にあるその語について *IPV* にこう語釈されている。

「それ」の=大主宰神 (*maheśvara*) の、‘*pratyabhijñā*’とは、反対方向に (*pratipam*)=自己との対峙により、認識すること (*jñāna*)=光照作用 (*prakāśa*) である。…また、*pratyabhijñā* は、かつて顕現した形質と現に顕現している形質とを同定すること (*anusamdhāna*) から成る。…周知の古譚や定説や聖典や推論などによって、主宰神 (*īśvara*) が完全な可能性を本性としていることが知られた上で、自己の本体に対峙せられたとき、それらの同定 (*pratisamdhāna*) によって「確かに私は、かの主宰神である」という認識が起こる。…*pratyabhijñā* が成立しているときには自分と他者という区別はない…。⁽⁶⁾ (*IPV* 1. 1. 1, vol. I, pp. 36-38)

すなわち、pratyabhijñā とは、全能の神と自己とを同定する認識であり、自己の本性としての神性を再認識・自覚することである。つまり、一元論的シヴァ派の第一の主張は、神と個我との一元論である。

(2) 物心一元論

Pratyabhijñā 論者は、意識ある者 (ajāḍa) と意識・感覚をもたない物 (jāḍa) すなわち精神と物質とを区別するという、常識的な物心二元論に異議を唱える。

壺などの光照 (prakāśa) は、認識 (saṃvid) の光照にはほかならない。ただしそれ (壺などの光照) は自律的・実在的なものではない。

一方、自我 (ātman) は光照そのものにほかならない。(IPV 1. 1. 2, vol. I, p. 56)⁽⁷⁾

光照 (prakāśa) とは、たとえば灯火が自ら光り現れるとともに他の事物を照らし出すという作用を指す。対象の認識に関して言えば、外界の対象物が認識を引き起こすのではなく、認識が光り現れることによって内的な対象を明瞭に意識することが対象の認識であるという。一方、自我の認識は、認識の主体である自我が自ら光り現れることにほかならない、ということになる。

しかるに真実には、すべてのものは、志向作用 (vimarśa) より成る認識主体の本質との同一性を有する自我意識 (ahaṃ-parāmarśa) に休息 (viśrānti, 依拠) しているゆえに、[対象の顕現の] 前後においては、精神的なもの (ajāḍa) にほかならない。(IPV 1. 5. 11, vol. I, p. 243)⁽⁸⁾

外界の事物として現れているものも、実は意識の内部に存するものであるから、精神的なものであるという。

或るものを新しいものとして顕現させる（知覚する）あるいは想起するといふときの、その或るもの（特定の認識対象）は、真実には、一切諸物から成る saṃvid との同一性をもって存在しているものであり、すなわち「一者は」一切諸物から成る、完全なものにほかならない。…（*IPV* 1. 3. 7, vol. I, p. 142）⁽⁹⁾

saṃvid という語は、一般的には「知、認識、意識」を意味するが、*IPV* においてはそれは「一切諸物から成るもの（viśvamaya）」という特殊な意味を賦与されている。saṃvid は精神的なものはずであるが、それが特定の認識対象たる物と同一性を有するという。そこには精神と物質という区別はない。

実体（dravya）とは、これ（実体）に休息していた（viśrānta）ものが〔励起したときには〕、あらゆる諸範疇の集合体（padārthavarga）として顕現し、合目的的作用（arthakriyā）に向けて作用するのであり、また、もしもこれ（実体）が励起しないならば、諸々の原理・元素・存在物・世界（tattva-bhūta-bhāva-bhuvana）の集合体の全部が saṃvid において休息したままの状態である、というところのものである。すなわち、属性や運動などの帰属者（dharma）の依存する基体（āśraya）となっている別なる範疇としての本質を有するもの（＝諸範疇の集合体）は、第一義的な実体としての形質を有するそれ（saṃvid）のみに依存している、というところのそれ（saṃvid）こそが、‘実体’なのである。（*IPV* 1. 5. 12, vol. I, p. 246）⁽¹⁰⁾

すなわち、saṃvid は精神的なものでありながら、一切諸物乃至あらゆる範疇の存在を保持する基体であり、所謂、実体（dravya）であるという。それは「普遍精神、普遍的意識体」⁽¹¹⁾などと称されうるかもしれない。

日常経験において知覚される物、行為の対象となっている物は、何らか

の契機によって、一時的に励起・活動状態になったときに、物質的な事物として現れるにすぎず、平常時には、saṃvid という精神的な存在の中に埋没して休止安息した (viśrānta) 状態にある、という。

非精神的な事物として顕現し認識されている諸物は、元素から世界に至るまで総て、本来は精神的なものである、というのである。中でも、諸世界 (bhuvana) すなわち重層的な生存領域は、言わば衆生を取り巻く環境であり、器世間に相当する。そのような外的世界・自然環境すらも精神的な存在の中にある、ということになる。

現象世界の一切諸物は物質的で意識をもたない物であるかのように見えるが、真実には一切は saṃvid という大いなる精神的存在に包容されている。世界は意識あるもの、精神的なるもので満ち溢れている、とも言えようか。このような物心一元論、もしくは唯心的一元論が、一元論的シヴァ派の第二の主張である。

(3) 実在的顕現説

saṃvid に内在し休息状態にある諸物は、如何にして、外界対象物・個別的事物・客体として顕現せられるのであろうか。

『精神 (cit) を本質とする者たる神 (deva) のみが、[自己の中に] 内在的に存続している (antaḥsthita) 質料因ならざる (nirupādāna) 事物対象群を、意欲 (icchā) の力によって、外的なものとして光照させうる。ヨーガ行者がそうするように。』(IPK 1. 5. 7)⁽¹²⁾

神の意志によって、神に内在する対象が外的なものとして顕現せられるという。ヨーガ行者が超自然的な力 (念力?) で事物を現出させるのと同様に、シヴァ神は質料因なしに意志のみによって外界対象を顕現させる。これはカシミール・シヴァ派に特徴的な教説としてよく知られている。⁽¹³⁾

この *IPK* 1. 5. 7 に対して、*IPV* にはこう説明されている。

自発的意志 (svātantrya) を有するものとして認められているところの saṃvid のみが、——妨げられないという特質をもつ特殊な意志の力により、saṃvid は付加物をもたないという本性を離れることがないゆえに——〔saṃvid の中に〕内在している存在物群を、縮減され局限された saṃvid という形態をとる (主体として想定されているものである) 生気や統覚器官や肉体 (prāṇa-buddhi-deha) 等の外側にある、‘これ’ というような (個別的な客体としての) 外在性を伴ったものとして、顕現させているのである。よって、ここ (現象世界) において一切諸物の形態の顕現 (ābhāsa) に多様性をもたらす、精神 (cit) を本質とする者 (神) のみの自発的意志が、どうして承認されないことがあるのか。それは自己の認識 (svasaṃvedana) により証明されている。(*IPV* 1. 5. 7, vol. I, p. 228)⁽⁴⁾

IPK で提示された、神の本質としての「精神 (cit)」は、*IPV* においては saṃvid と換言されている。saṃvid がシヴァ神の本体なのである。そして神は、自己の本体たる saṃvid に内在する対象物群の中から或る対象を、自らの意志のみによって随意に選び出して、個別的・外在的な対象として顕現させているのであるという。

主宰神性の本質である行為主体性 (kartṛtva) の可能力 (śakti) は、全ての可能力を包摂している。そして、それは志向作用 (vimarśa) を本質としている。… 光照を本質とする最高主宰神は、知覚主体たることを唯一の形質とするのであるから〔本来的には〕知覚対象ではないけれども、自己を知覚対象化する。… それは、志向作用の可能力を特質とする行為主体性を原因としているのである。というのも、かれ (最高主宰神) は、自己を意識することによって一切諸物を保持

しているゆえに、そのように（自己の意識に即した形で）〔自己を〕
青など（個別的知覚対象）として照出するのであるから。（*IPV* 1. 5. 15-
16, vol. I, pp. 267-268）⁽¹⁵⁾

前掲の説明とほぼ同様の内容であるが、自発的意志（svātantrya）の代
わりにここでは vimarśa という語が用いられている。vimarśa は一般的
には「熟慮・反省」等を意味するが、シヴァ教文献においては「自己反
省・自己意識化」等を意味する術語として用いられる。筆者はこれを「志
向作用（intentional act）」と解することを提案している。⁽¹⁶⁾

現に顕現しているものは、所知対象に存する次第（krama, 時間的・
空間的限定性）を受容している顕現を有するゆえに、次第を伴うもの
であるとしても、勝義的ならざるもの（非実在）ではない。現に顕現
しているものが勝義的なものなだけだから。（*IPV* 1. 5. 21, vol. I, p. 298）⁽¹⁷⁾

神の自発的意志により顕現せられたものは、個別的な認識対象として時
間的・空間的限定性を賦与されてはいるが、本質的には神に内在している
ものと同一であり、真実の存在であるという。このように Pratyabhijñā
論において説かれる「顕現（ābhāsa）」は、虚妄なる幻影としての現れで
はなく、実在的な顕現をいうのである。

以上に見たように、Pratyabhijñā 論者によれば、シヴァが自らを反省
し、自らの内に安息している内的対象に照準を合わせた時、すなわち、シ
ヴァが自らの自発的意志（svātantrya）により志向作用（vimarśa）の可能
力を行使した時に、普遍意識 saṃvid は休止安息状態から励起状態になり、
それに内在していた対象が時間的・空間的な限定因子を伴った外的な事物
として顕現（ābhāsa）するに至る。そしてその場合、その対象物は顕現し
ている通りに実在する。個物は saṃvid すなわちシヴァの中において完成
体として永続する存在だからである。

(4) 主客一元論

Pratyabhijñā 論者は、主体と客体との区別を措定するという、常識的な主客二元論を否定する。

『所取 (grāhya) 能取 (grāhaka) として区別されている対象 (artha) は両方共に、「私によって見られている」「[私によって] 見られた」「これ」「それ」ということを意識する真知主体 (pramāṭr) において、⁽¹⁸⁾ 顕現しているのである。』(IPK 1. 4. 8)

顕現 (avabhāsana) は、純粹清浄なる精神 (cit) より成る勝義的な真知主体 (paramārtha-pramāṭr) に内在せられているものの〔顕現〕、すなわち、それ(勝義的真知主体)との一体性を離脱していないものの〔顕現〕のみが、ありうる。⁽¹⁹⁾ (IPV 1. 5. 1, vol. I, pp. 196-197)

日常経験上、主体 (pramāṭr, grāhaka) と客体 (prameya, grāhya) という区別が設定されているが、真実にはそのような主客二項対立はなく、主体と客体として顕現している両者は共に、勝義的な主体に内在しているという。主体と客体は真の主体に帰一せられる。あるいはまた、一切諸物は真の主体の現れであり、この世界は主体たる存在で満ち溢れているとも言えよう。このように一元論的シヴァ派は、勝義的主体における主客一元論を主張する。

他者性は、単に身体〔・生氣・統覚器官〕等の限定的添性 (upādhi) によるものにすぎない。そして、それ(限定的添性)もまた〔真知主体とは〕別なる者ではない、と考えられる。つまり、一切は真知主体の集合体であり、勝義的には、単一の真知主体なのであり、そして、それ(単一の真知主体)のみが存在するのである。⁽²⁰⁾ (IPV 1. 1. 5, vol. I, p. 76)

諸々の限定因子を伴って個別的主体として顕現している者は、真実には
— 118 — 中世ヒンドゥー教一元論哲学における自然観 (戸田裕久)

単一なる勝義的主体の内に存在する。それでは、真の主体とは何者か。

身体等が真知主体として誤認されている状況においても、真実には光照を本質とする最高主宰神 (parameśvara) のみが真知主体である。
(*IPV* 1. 6. 8, vol. I, p. 334)⁽²¹⁾

勝義的主体とは、最高主宰神、すなわちシヴァにほかならない。

無垢の鏡の〔中に映る〕都城〔の全景の映像〕において〔と同様に〕自己の本体においてはまったく同等のものであり、光照という自己の形質から分離せられていない、一對のものを〔能取・所取として分化させて〕顕現させているのは、最高主宰神なのである。(*IPV* 1. 4. 8, vol. I, pp. 190-191)⁽²²⁾

最高主宰神の本体は、一切諸物を包容している saṃvid である。それはたとえば、景色全体を限なく映す鏡の中に多種多様な事物や人々の影像が映しこまれているように、saṃvid の中において諸々の事物および個別的主体の一切が休息しているのである。そこには主体と客体との区別はない。

(5) 日常経験の成因としての主宰神

日常経験世界における諸現象・認識の成立には、個別的な対象と有効な手段と行為主体・認識主体といった諸要件が必要であり、さらにそれらの基盤として主体と客体との区別が要請される。そのような対象や主体の個別性や主客の分化をもたらすものは何か。

『もしも、内在化されている (antaḥkṛta) 無限の一切諸物の形質を具えた者であり、精神を本体とする者 (cid-vapus) であり、知覚と記憶と弁別の可能性を有する (jñāna-smṛty-apohana-śaktimat), 単一者 (eka) である、大主宰神 (maheśvara) が存在しないならば〔個別性は成立しないであろう〕。』(*IPK* 1. 3. 7)⁽²³⁾

一切の日常経験 (vyavahāra) は〔知覚・記憶・弁別という〕三つの可能性によるのである。そして、尊主 (大主宰神) じしんの三つの可能性が、そのようにして (三つの可能性により) 知覚主体・記憶主体・弁別主体としての本質 (=真知主体性) を具有するチャイトラやマイトラなど〔の個別的主体〕を顕現させているのである。というのも、彼 (尊主) のみが、個々それぞれの形態をとって、知覚し記憶し弁別するのであるから。(IPV 1. 3. 7, vol. I, p. 143)⁽²⁴⁾

一切諸物に対する光照と志向作用とが、一切諸物の形態を有する尊主 (大主宰神) の本質たるものにほかならない。実に、それら (光照と志向作用) が〔神の〕「知識」と「行為」なのである。(IPV 4. 1. 4, vol. II, p. 285)⁽²⁵⁾

一元論的シヴァ派によれば、日常経験の成因は、主宰神の諸々の可能性、その根元としての自発的意志すなわち志向作用であるという。神の意志の力がなければ、日常経験は成立しない。いま現に日常経験が成立しているならば、そこには必ず神の意志の力が働いている。日常経験世界における事象の一つ一つが、シヴァの力、ひいてはシヴァ神の存在を示唆する傍証となる、というのである。

(6) 「自然」観

以上、一元論的シヴァ派の Pratyabhijñā 論書における主要論点の概略を述べたが、そこに垣間見える世界観もしくは自然観に触れておこう。

我々は自己を取り巻く環境、衆生の生存領域たる器世間といった外在的世界の実在性を信じて疑わない。そのような常識的な世界観に立脚している哲学者たちは、世界乃至は宇宙の構造、その創造・維持・帰滅の過程、それを成立させている根元的な質料因・動力因・その他の要因、等の問題

に関して、想像力たくましく憶測をめぐらし議論を闘わせている。

しかるに、Pratyabhijñā 論者の所説によれば、真実には、この世界には始まりも終わりもない。創造 (sṛṣṭi) も帰滅 (saṃhāra) も起こってはいない。ただ、主宰神シヴァの本体である普遍意識 saṃvid に内在し完成体として永続的に存在する事物が、顕現 (ābhāsa) せられているか、休息 (viśrānti) または隠蔽 (tirodhāna) せられているかのいずれかである⁽²⁰⁾。一切は神の意識の中の戯れにすぎない。このような一元論的シヴァ派の見地からすれば、勝義的には、衆生を取り巻く環境・外界・器世間としての「自然 (しぜん)」なるものはありえないであろう。

しかも、彼らによれば、諸々の事物は神の意志のみにより存在しているのである。事物が、非人為的に、それ自体の本性に従って、すなわち「自然 (じねん)」に存在するということはない。むしろ、あらゆる事物の本性あるいは本体は、究極的には、唯一、シヴァのみである、という。

2. 自然法則・因果関係をもたらす要因

一元論的シヴァ派 Pratyabhijñā 論者は、上に見たように、勝義的には外的な自然環境や外界対象物といったものはなく、一切の諸物はシヴァに内在し、諸現象はシヴァの意志によって成立する、と主張する。ただし、他学派の見解との相違点を明らかにする過程においては、外界、自然界、自然現象、因果関係といったものの存在を暫定的に認めた上で、議論を展開している。

(7) 主宰神による創造

神による創造とは、宇宙開闢、太初の天地創造のみを指すのではなく、

今現在の諸現象の成立も、神の創造に帰せられる。——これは、一神教的な諸宗教の多くに共通した神観であると思われる。しかし、至高神、主宰神が立てられてはいても、単なる造物主として想定されているのであれば、それは名目的なものにすぎず、そのような神観は一神教的と呼ぶに値しないであろう。

たとえば、ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派も主宰神 (īśvara) を立てるのであるが、彼らによれば、主宰神は既存の常住なる構成要素を材料として世界を創造する者であるが、構成要素とは別個の存在であり、創造に関して動力因としての役割しか果たさない⁽⁷⁾。主宰神は世界の質料因ではなく動力因なのであり、世界の構成要素や個我を創造したのではなく、それらを支配している者である⁽⁸⁾、という。

しかるに、一元論的シヴァ派によれば、主宰神は個々の事物との同一性を有しており、日常的に経験される具体的な諸事象の成立に直接的に関与する者なのである。

『この者 (主宰神) のみが、無限の可能力 (śakti) を有するゆえに、意欲の力によって、それら諸々の存在物 (過去に顕現させた物) を、そのように (同一性を保存させて) 顕現させる。これこそが、彼の行為 (kriyā) であり、造化主体性 (nirmāṛtā) である。』(IPK 2. 4. 1)⁽⁹⁾

造化作用 (nirmāṇa) とは、内的に顕現しているものを、その形態を失わせることなくそのまま、外的に顕現させることである。(IPV 2. 4. 6-7, vol. II, p. 161)⁽¹⁰⁾

ほかならぬ主宰神じしんが、種子や地面や水の顕現と共にある芽との同一性をもって顕現する。このようなことが、それ (種子の発芽) における真実の在り方 (勝義) なのである。(IPV 2. 4. 8, vol. II, p. 164)⁽¹¹⁾

神による創造あるいは造化 (nirmāṇa) とは、前述したような、実在的

な顕現にほかならない。そして、その顕現をもたらす要因は、神の意欲すなわち自発的意志 (svātantrya) である。

精神的存在 (cetana) である彼 (神) の自発的意志 (svātantrya) のみが、あらゆるものに発動し (jṛmbhamāṇa), 非精神的な諸物 (jaḍa) にさえも自己 (精神的存在) との同一性を獲得させる、ということが現に見受けられる。(IPV 2. 4. 10, vol. II, p. 170)³³⁾

(8) 自然な因果関係と不自然な因果関係

神の自発的意志は、次のような二通りの仕方で発揮されるという。³³⁾

夥しい光を放つ者である尊主、偉大なる神は、自然法則 (niyati) に随順する、あるいはそれを逸脱する、きわめて堅固な自発的意志を有する。——というこの見解に拠れば、自然法則に随順する者の自発的意志は、周知の世間的通常的な (laukika) 因果関係 (kāryakāraṇa-bhāva) において〔発動されるの〕であり、他方、それ (自然法則) を逸脱することに專注している者の〔自発的意志〕は、専らヨーガ行者に見られるものとして周知の超世間的超常的な (lokottara) 〔因果関係〕において〔発動されるの〕である。(IPV 2. 4. 10, vol. II, pp. 172-173)³⁴⁾

ここに「自然法則」という訳語を与えた niyati とは、シヴァ教聖典によれば、世界開展の次第における三十六原理 (ṣaṭtriṣaṭ-tattvāni) の内の、業の主体である個我 (puruṣa) を成立させる五種の束縛因子 (kañcuka), すなわち、有限的能力 (kalā), 有限的認識 (vidyā), 愛執 (rāga), 時間 (kāla), 必然的関係 (niyati) の内の一つである。³⁵⁾しかるに、推理知に関して論及している IPK / IPV 2. 4. 11 (vol. II, pp. 173-181) の文脈から判断すると、niyati は論理的必然関係 (niyama) の成立要因として扱われて

いる。そこで、これを「必然性・法則性・因果関係・論理的法則」といった意味に解するのが適当であろう。そして、推理知 (anumāna) の成立要件である論理的必然関係 (niyama) は、自然界における摂理、因果の法則や必然的随伴関係にもとづいていると考えられるから、niyati を「自然法則」と称しても大過ないと思われる。

さて、この「自然法則」をもたらす可能性の発動の仕方に応じて、二通りの因果関係がありうるという。すなわち、

(i) 神が自然法則 (niyati) に随順するような自発的意志を発動させた場合には、世間的通常の因果関係、すなわち「自然」な因果関係が成立する。この場合、神が自然法則に即した事物・事象として顕現する。

(ii) 神が自然法則を逸脱するような自発的意志を発動させた場合には、超世間的超常的な因果関係、すなわち「不自然」な因果関係が成立する。この場合、神が自然法則に反する事物・事象として顕現する。なお、ヨーガ行者の造化作用などの超自然力が、その類例として挙げられうる。

このように場合分けすることにより、通常的事象と超常的事象とが峻別される。と同時に、それら両者が共に、神の秩序体系の中に組み込まれることになる。換言すれば、ヨーガ行者の超自然力などの超常的現象は、一見、神の統べる世界の秩序を乱しているように見えるが、実はそれすらも、神の意志によるものである、ということになる。

このように、Pratyabhijñā 論においては、自然界の摂理・法則といったものにまで神の意志の力が及んでいるとされている。のみならず、神は、自然界の法則までも随意に歪曲することが可能であるという。

宇宙の法則、自然の摂理を不変・普遍なるものとして、そこに神の力なり意志なりを感じ取るというのであれば、すなわち、自然界を支配する不変の法則を神の力に喩えるというのであれば、珍しいことではない。しか

るに、神の力であればこそ、自然界の法則をも変えることができるという理屈は、いささか奇異に思われることであろう。神は「自然」のみならず、「不自然」をも創造しているとは。

3. 一元論的シヴァ派に「自然」観はある

一元論的シヴァ派 Pratyabhijñā 論においては、非精神的存在、乃至は外界対象物と見なされている事物も、実は精神原理に内在する精神的存在であるとされている。また、神みずからが、日常経験される具体的な事象や個々の事物において、それらとの同一性をもって顕現する、と言う。こうして、あらゆる範疇の存在が、究極的な主体・精神的存在との同一性をもつものとして一元化されることになる。最高神は、一切諸物から成る者であり、かつ、一切諸物を超越する者である、とも説かれている⁶⁶⁾。

世界全体が、シヴァという大いなる精神、神的意識体に包まれている、その中の個々の存在者はすべて有機的につながっている、あるいは、各々がシヴァそのものとして存在している、という世界観。人間もその他の衆生も無生物も自然も、シヴァにおいては区別がない。森羅万象すなわち自然界の一切諸物に、神の意志と活力の現れを見、世界全体を一個の意識体、神であると見る、世界観。これを「自然」観の一種と見做すことができるとすれば、一元論的シヴァ派にも「自然」観はある、と言えるかもしれない。

あるがままの自然を、現実の世界の在り方を、神の存在する証として、全肯定する。そのような楽天的な世界観、澄明な思想を生み育てたのは、美しく鮮やかな、カシミールの自然ではなかったか。⁶⁷⁾

注

- (1) Kashmiri Trika という呼称については、Alexis Sanderson [1988] “Śaivism and the Tantric Traditions” in *The World's Religions*, London, p. 690f. 参照。
- (2) Pratyabhijñā-śāstra が基本文献とされるのは、マダーヴァ (Mādhava) の *Sarvadarśanasamgraha* (『全哲学綱要』) 中、一元論的シヴァ派の哲学を扱う第 8 章 Pratyabhijñādarśana に引用される文言の大半が *IPK* / *IPV* からのものであることから窺えよう。武田耕道 [1973] 「Mādhava の著作手法——Sarvadarśanasamgraha, 第 7 章 Śaivadarśanam 及び第 8 章 Pratyabhijñādarśanam の場合」(『印度学仏教学研究』第 21 卷第 1 号) 参照。
- (3) *IPK* および *IPV* の刊本 : [1] *Īśvara-Pratyabhijñā of Utpaladeva with the Vimarśinī by Abhinavagupta*, Volume I: edited with notes by Paṇḍit Mukund Rām Shāstrī, Kashmir Series of Texts and Studies, No. 22, Srinagar, 1918; Volume II: edited with notes by Paṇḍit Madhusudan Kaul Shāstrī, Kashmir Series of Texts and Studies, No. 33, Srinagar, 1921.
[2] *Īśvara-Pratyabhijñā-Vimarśinī of Abhinavagupta, Doctrine of Divine Recognition, Sanskrit Text with the Commentary Bhāskarī*, Volume I and II, edited by K. A. Subramania Iyer and K. C. Pandey, The Princess of Wales Sarasvati Bhavan Texts, No. 70, 1938, No. 83, 1950; Reprint: Motilal Banarsidass, Delhi, 1986.
このうち本稿では [2] を底本として用いる。
[2] の英訳 : K. C. Pandey [1954] *Doctrine of Divine Recognition*, Volume III, English Translation, The Princess of Wales Sarasvati Bhavan Texts, No. 84, 1954; Reprint: 1986.
なお、*IPK* およびそれに対するウトパラデーヴァの自註の校訂本としては、Raffaele Torella [1994] *The Īśvarapratyabhijñārikā of Utpaladeva with the Author's Vṛtti, Critical edition and annotated translation*, Serie Orientale Roma, LXXI, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma.
- (4) シヴァ派の論書には自然に関する記述が見当たらないと断言するつもりはなく、ただ単に筆者の勉強不足のゆえにすぎない。しかし、一元論的シヴァ派の立場からすれば自然に対して関心が払われないとしても不思議ではない。また、仏教においても外的環境としての「自然」に関する記述は少ないという趣旨のご発言が、本学術大会において多くの先生方から聞かれた。これも、仏教の唯心論的傾向からすれば当然かもしれない。

- (5) *IPK* 1. 1. 1: kathamcid āsādyā maheśvarasya dāsyam janasyāpy upakāram icchan / samastasampatsamavāptihetuṃ tatpratyabhijñāṃ upapādayāmi //
- (6) *IPV* 1. 1. 1, vol. I, p. 36: tasya maheśvarasya pratyabhijñā pratīpam ātmābhīmukhyena jñānaṃ prakāśaḥ pratyabhijñā / ... pratyabhijñā ca bhātabhāsamānarūpānusamdhānātmikā,... / p. 38: ihāpi prasiddhapurāṇasiddhāntāgamānumānādividitapūrṇaśakti-svabhāve īśvare sati svātmāny abhimukhībhūte tatpratisamdhānena jñānam udeti, nūnaṃ sa eva īśvaro 'ham iti / ... pratyabhijñopapattau svaparavibhāgābhāve ... /
- (7) *IPV* 1. 1. 2, vol. I, p. 56: tasmāt saṃvitprakāśa eva ghaṭādiprakāśaḥ, na tv asau svatantraḥ kaścit vāstavaḥ, prakāśa eva ca ātmā, ... /
- (8) *IPV* 1. 5. 11, vol. I, p. 243: sarvatra* vastuto vimarśātmakapramāṭṭi-svabhāvatādātmyāhaṃparāmarśaviśrānteh ajaḍatvam* eva pūrvāpara-koṭyoḥ / [*ただし, *IPV* の刊本 [1] vol. I, p. 199 には, sarvatra の代わりに sarvaṃ tu, ajaḍatvam の代わりに ajaḍam とある。翻訳に当たっては, この [1] の読みを採用した。]
- (9) *IPV* 1. 3. 7, vol. I, p. 142: yac ca navaṃ bhāsayati smarati vā tat vastutaḥ saṃvidā viśvamayyā tādātmyavṛtti iti viśvamayaṃ pūrṇam eva iti navaṃ na kiṃcit ābhāsitaṃ smṛtaṃ vā syāt /
- (10) *IPV* 1. 5. 12, vol. I, p.246: dravyaṃ hi tat ucyate, yadviśrāntaḥ padārthavargaḥ sarvo bhāti ca arthyate ca arthakriyāyai, tad yadi na kupyate, tat sakālo 'yaṃ tattvabhūtabhāvabhuvanasamḥhāraḥ saṃvidi viśrāntaḥ tathā bhavati iti sa eva guṇakarmādidharmāśrayabhūta-padārthāntarasvabhāvaḥ tām eva mukhyadravyasvarūpām āśrayate iti sāiva dravyam /
- (11) K. C. Pandey [1954] は saṃvid を the universal consciousness と訳している。
- (12) *IPK* 1.5.7: cidātmāiva hi devo 'ntaḥsthitam icchāvaśād bahiḥ / yogīva nirupādānam arthajātaṃ prakāśayet //7//
- (13) R. G. Bhandarkar [1913] *Vaiṣṇavism, Śaivism and Minor Religious Systems*, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, p. 185. R. G. バンダルカル著, 島岩+池田健太郎訳『ヒンドゥー教——ヴィシュヌとシヴァの宗教』(せりか書房, 1984年) 376頁参照。
- (14) *IPV* 1. 5. 7, vol. I, p. 228: yat saṃvit eva abhyupagatasvātantryā

apratighātalakṣaṇāt icchāviśeṣavaśāt saṃvido 'nadhikātmatāyā
anapāyāt antaḥsthitam eva sat bhāvajātam idam ity evaṃ prāṇa-
buddhidehadeḥ vitirṇakiyanmātrasaṃvidrūpāt bāhyatvena ābhāsayati iti,
tat iha viśvarūpābhāsavaicitrye cidātmana eva svātantryaṃ kiṃ na
abhyupagamyate svasaṃvedanasiddham /

- (15) *IPV* 1. 5. 15-16, vol. I, pp.267-268: sarvāḥ śaktiḥ kartṛtvaśaktiḥ
aiśvaryātmā samākṣipati / sā ca vimarśarūpā iti yuktam asyā eva
prādhānyam iti tātparyeṇa uttaram uktam /
...prakāśātmā parameśvaraḥ svātmānaṃ jñātrekarūpatvāt ajñeyam api
jñeyikaroti iti yat saṃbhāvyate kāraṇāntarasya anupapatteḥ darśita-
tvāt dṛḍhena saṃbhāvanānumānena, tad ata eva vimarśaśaktilakṣaṇāt
kartṛtvāt hetoḥ bhavati, yato hi ayaṃ ātmānaṃ parāmṛṣati tato viśva-
nirbharatvāt tathā nilāditvena cakāsti /
- (16) Torella [1994] p. xxiv, fn. 32; 高島 淳 [1988] 「タントリズム」(『岩波
講座東洋思想 第六巻 インド思想 2』岩波書店); 高島 淳 [1989] 「タント
リズムにおける言葉の呪力」(『岩波講座東洋思想 第七巻 インド思想 3』岩
波書店); 戸田裕久 [1994] 「シヴァー元論における志向作用——アピナヴ
ァグブタにおける vimarśa と pratyavamarśa の用法」(東京大学文学部イ
ンド哲学仏教学研究室『インド哲学仏教学研究』2) 等参照。
- (17) *IPV* 1. 5. 21, vol. I, p. 298: tena vedyagatakramasvikārābhāsāt sa-
kramatvam ābhāsamānam api na apāramārthikam ābhāsamānasya
paramārthatvāt, ... /
- (18) *IPK* 1. 4. 8: tan mayā dṛśyate dṛṣṭo 'yaṃ sa ity āmṛṣaty api /
grāhyagrāhakatābhinnāv arthau bhātaḥ pramātari //8//
- (19) *IPV* 1. 5. 1, vol. I, pp.196-197: avabhāsanam tat paramārthapramātari
śuddhacinmaye antaḥsthitavatām tena saha aikātmyam anujhitavatām
eva ghaṭate ... /
- (20) *IPV* 1. 1. 5, vol. I, p. 76: paratvaṃ kevalam upādher dehādeḥ, sa cāpi
vicārito yāvat na anya iti viśvaḥ pramāṭṛvargaḥ paramārthata ekaḥ
pramātā sa eva ca asti /
- (21) *IPV* 1. 6. 8, vol. I, p. 334: prakāśātmā parameśvara eva yato dehādi-
pramāṭṛtābhimānadaśāyām api vastutaḥ pramātā, ... /
- (22) *IPV* 1. 4. 8, vol. I, pp.190-191: evaṃ samam eva svātmāni nirmala-
mukurasthāniye yat yugalakaṃ svasmāt prakāśarūpatvāt avyতিরিক্তam
avabhāsayati parameśvaraḥ /

- (23) *IPK* 1. 3. 7: na ced antaḥkṛtānantaviśvarūpo maheśvaraḥ /
syād ekaś cidvapur jñānasmṛtyapohanaśaktimān //7//
- (24) *IPV* 1. 3. 7, vol. I, p.143: śaktitrayeṇa viśve vyavahārāḥ / tac ca
bhagavata eva śaktitrayam, yat tathābhūtānubhavitṣmarṭṛvikalpayitṣ-
svabhāvacaitra-maitrādyavabhāsanam / sa eva hi tena tena vapuṣā jānāti
smarati vikalpayati ca /
- (25) *IPV* 4. 1. 4, vol. II, p. 285: viśvarūpasya bhagavataḥ svarūpabhūta eva
viśvatra yaḥ prakāśo yaś ca vimarśaḥ, te tāvaj jñānakriye ...
- (26) See Hirohisa Toda [1997] “An Instance of Syncretism of the Spanda-
and Pratyabhijñā-systems,” *Bukkyo Bunka Kenkyu Ronshu* (『仏教文化研
究論集』) or *Studies of Buddhist Culture*, Young Buddhist Association of
the University of Tokyo (東京大学仏教青年会), vol. 1, pp.25-38.
- (27) 中村 元 [1950] 『初期のヴェーダーンタ哲学』(岩波書店) 371頁。
- (28) 泰本 融 [1976] 『東洋論理の構造——ニヤヤ学説の研究』(法政大学出
版局) 144頁参照。これは Uddyotakara の *Nyāyavārtika* における主宰神観
である。
- (29) *IPK* 2. 4. 1: eṣa cānantaśaktivād evam ābhāsayatya amūn /
bhāvān icchāvaśād eṣā kriyā nirmāṛtasya sā //1//
- (30) *IPV* 2. 4. 6-7, vol. II, p.161: antarbhāsamānasya tathārūpāpari-
tyāgenaiva bahirābhāsanam nirmāṇam /
- (31) *IPV* 2. 4. 8, vol. II, p.164: tataś cēśvara eva bijabhūmijala-
ābhāsasāhityena ankurātmanā bhāsate itiyān atra paramārthaḥ /
- (32) *IPV* 2. 4. 10, vol. II, p.170: dṛśyate 'sya cetanasya svātantryam eva
sarvatra jṛmbhamāṇaṃ jaḍān api yat svātmatām āpādayati /
- (33) これについては、拙稿、戸田裕久 [1995] 「自然法則に反する事例——カ
シミール・シヴァ派のヨーガ観に関する一考察」(『東方』第11号, 161-173
頁)において指摘しておいた。
- (34) *IPV* 2. 4. 10, vol. II, pp.172-173: bhagavān bhūribhargo mahādevo
niyatyanuvartanollaṅghanaghanatarasvātantryaḥ ity atra pakṣe
niyatyanuvartinaḥ laukike prasiddhe kāryakāraṇabhāve svātantryaṃ
tadullaṅghanam ādriyamāṇasya tu yogiprāyaprasiddhe lokottare iti na
kaścit virodhaḥ /
- (35) 高島 淳 [1988] 「タントリズム」(前掲) 131頁においては、niyati は
「被限定性(特定のカルマをこうむる主体であること)」と解されている。中
村 元 [1968] 『インド思想史』第2版(岩波全書) 201頁には、「必然」と

ある。

③6) *IPV* 4. 1. 4, vol. II, p. 285: *viśvarūpasya bhagavataḥ svarūpabhūta eva viśvatra yaḥ prakāśo yaś ca vimarśaḥ, ... /*

IPV 3. 1. 1, vol. II, p. 213: *padārthanirṇayaṃ viśvaprameyikaraṇa-pratilabdhatadviśvottirṇapramātrpadahṛdayaṅgamikārābhīprāyeṇa nir-ūpayitum ... /*

Pratyabhijñāhṛdayam of Kṣemarāja (ed. and trans. by Jaideva Singh, *The Secret of Self-Recognition*, 4th ed., Delhi, 1982), p. 54: *śrīmatparama-śivasya punaḥ viśvottirṇaviśvātmakaparamānandamayaprakāśaika-ghanasya /*

③7) 残念ながら、筆者は未だカシミール地方を訪れる機会を得ていない。長らく続く紛争により、かの地は荒廃しているかもしれないし、人間共の諍いとは無関係に、その自然はあくまでも美しいままであるかもしれない。あるいは、一時的に破壊されたとしても、緩やかではあるが着実に、自然は蘇生し回復してゆくことだろう。実際に我が目で確かめたわけでもないのに、カシミールは美しい、と口にするのはいささか気が引けるのであるが。

実を言うと、「中世ヒンドゥー教一元論哲学における自然観」という発表題目を本学会事務局に提出した時点では、どのような内容を発表するかはまったく白紙の状態であった。期日が迫った秋口、東洋文化研究所での研究会の折に、タントラ研究を専門とする先生方にお会いすることが出来、相談を持ちかけた。しかしそこで我々が逢着したのは、「一元論的シヴァ派に‘自然’観などありうるだろうか」という疑問であった。その後も「一元論的シヴァ派」と「自然」とが頭の中で結びつかず、悶々としていた。

或るとき突然、「カシミール」と「シヴァ派」と「自然」という語が、十数年前に或る先生と交わした言葉呼び起こした。カシミールはどんなところですか、という素朴な私の質問に、かの地の自然の素晴らしさをひとしきり称えられたあと、先生は独り言のように、こう呟かれた。「あのような自然だから、あのような思想が生まれたのかもしれない。」

本稿は、平成14・15年度 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究A「中世インド思想の学際的研究」による研究成果の一部である。